江戸時代の流行と美意識
装いの文化史

【監修】
谷田有史 たばこと塩の博物館
村田孝子 ポーラ文化研究所

MIKI PRESS
三樹書房

装いの文化史【入稿】.indb 1 2015/06/01 15:15

はじめに

平成三年（一九九一）、たばこと塩の博物館とポーラ文化研究所の共催で行った、特別展「粧いの文化史～江戸の女たちの流行通信～」に合わせて作成した図録であったが、その時は、展覧会が終わっても活用して頂ける様な体裁で作ったつもりである。

その『粧いの文化史』を二十四年ぶりに、三樹書房のご尽力で『江戸時代の流行と美意識 装いの文化史』として出版できることになった。今回は、江戸の女たちの流行通信という女性に限った枠をとりはずし、江戸時代の男性の装いにも触れている。江戸時代の化粧、髪型、衣装などを見ると、ある程度、どのような女性なのか判断できた。それは男性でも同じである。女性は化粧、髪型が身分、階級、そして、年齢や未婚・既婚で変化し、職業でも違っていた。また、衣装やきせるなど装身具まで、身分、階級などで違ったのである。そういった違いを、浮世絵、小袖意匠、喫煙具、化粧道具、結髪雛型を通して、改めて紹介したい。今見ても、輝きは当時と変わらないものばかりであるが、これからも、多くの方々の参考資料として、この本も長くお手元に置いて頂ければさいわいである。

ポーラ文化研究所　村田孝子

装いの文化史【入稿】.indb 2-3　2015/06/01 15:15

◈目次

はじめに　3

第1章　江戸時代の女性の身だしなみ——江戸の女性は清潔好き

基本の身だしなみ
洗顔から化粧まで　村田孝子　ポーラ文化研究所　8

第2章　女の装い——江戸時代に花ひらいた装いの文化

髪と髪飾り
江戸時代の髪型　村田孝子　ポーラ文化研究所　16

髪飾りや袋物で個性を演出
髪飾りの意匠　橋本澄子　東京国立博物館名誉館員　37
女性と袋物　小菅桂子　元杉野女子大学講師　53

江戸と京坂の化粧比較
江戸の薄化粧　高橋雅夫　ビューティーサイエンス学会理事長　63

ファッションとしての喫煙
女性とたばこ　谷田有史　たばこと塩の博物館学芸部主任学芸員　83

小袖から発展した「きもの」
小袖意匠にみる異装の系譜　丸山伸彦　武蔵大学人文学部教授　98

武家から町民へ婚礼儀式の変遷
江戸時代の婚礼　吉見周子　元日本大学講師　109

第3章　男の装い——粋でいなせな男と呼ばれるためには

男たちのこだわり
着物とダンディズム　谷田有史　たばこと塩の博物館学芸部主任学芸員　122
男性の髪型　村田孝子　ポーラ文化研究所　133

第4章　江戸時代のファッションリーダー——大きな影響力を持っていた遊郭

重要な主題だった美人風俗画
浮世絵に描かれた女性たち　浅野秀剛　公益財団法人　大和文華館館長　140

流行の発信地
ファッションリーダーとしての遊郭　佐藤要人　近世文学研究家　151

主な参考文献　168
おわりに　172

装いの文化史【入稿】.indb　4-5　2015/06/01　15:15

※収録した図版の寸法はすべてセンチメートルです。

第1章

江戸時代の女性の身だしなみ

江戸の女性は清潔好き

基本の身だしなみ

洗顔から化粧まで

村田孝子◉ポーラ文化研究所

江戸時代の女性たちは、どのような身だしなみを行っていたのか。基本的なところから見てみよう。

◈ 歯磨きと洗顔

江戸時代の歯磨きは、今の歯ブラシの代わりに柳の枝でつくった房楊枝と、房州砂に竜脳や丁子、白檀などの香料で香りつけをした歯磨粉で歯を磨いていた。また、江戸時代末期には、紅を加えた紅入り歯磨粉なども人気があったらしい。ちなみに房楊枝や歯磨粉などは、楊枝屋などで売っていた。

また、洗顔は、石鹸のかわりに糠や洗粉が使われた。赤い布を袋にした糠袋（紅葉袋ともい

浮世四十八手
夜をふかして朝寝の手
溪斎英泉画
文政４～５年(1821～22)頃
ポーラ文化研究所所蔵

タイトルの夜をふかして朝寝の手、というのは、朝寝坊のこと。朝寝坊をしたのは、下の女性で長い房楊枝に紅入り歯磨粉を付けている。髪型は達磨返しで、上品ではないが、年増や粋筋の女性も結った。

装いの文化史【入稿】.indb 8-9 2015/06/01 15:15

う）で、その中に糠や洗粉を入れ、お湯の中でギューと絞って顔や襟、首といったところキュキュと擦り、そのあとお湯で洗い落とした。洗顔などに使う糠は、銭湯でも売っている様子が浮世絵などにも描かれている。糠は、一回使ったら捨てるのが普通で、銭湯で糠を捨てている様子、そして、糠袋だけ持ち歩いている女性の姿が、これも浮世絵などによく描かれている。ところで、洗顔に使った糠はタンパク質や脂肪を含んでおり、皮膚のためには天然のクリームといった役割も果たしていたようだ。

◈ 江戸の化粧水

歯磨き、洗顔が終わったあと、化粧水を使用したが、化粧水で有名だったのが、花露屋から発売されていた「花の露」と、式亭三馬が文化八年（一八一一）に売り出した「江戸の水」であった。「花の露」は、天和二年（一六八二）井原西鶴が書いた『好色一代男』（巻二）に、「芝神明の前の花の露屋の…」とか、（巻三）にも「しぶりかはのむけたる女は心のまゝ昼寝して、手足もあれず。鼈甲のさし櫛、花の露といふ物をしりて、すこし匂ひをさす事、…」と書かれている。芝増上寺の東、大門の傍らにあった芝神明前の「花露屋」は、寛永の末、喜左衛門（喜右衛門とも）という江戸の医師がつくったといわれ、江戸初期から明治時代まで続いた化粧品店だった。「花の露」は当初、化粧油として市販されていたが、江戸時代後期には油を使わない化粧水として人気を博していた。つくり方は文化十年（一八一三）に出された総合美容読本『都風俗化粧伝（みやこふうぞくけわいでん）』に詳しく書かれている。原料は茨の花、丁子、片脳、白檀でつくるのであるが、顔に塗れば光沢が出て、香いもよく、きめを細かにし、顔の腫物をいやす、と効能をうたっている。多くの女性たちに愛用されたのだろう。

一方、式亭三馬の売り出した化粧水「江戸の水」の処方は、はっきりしないが、自分が書いた『浮世風呂』（一八〇九～一三）に、「●ハイ、只今は二丁目の式亭で賣ます ▲エゝ、何かネ。このごろはやる江戸の水とやら白粉のよくのる薬を出す内でございませう…」と、宣伝をしている。「花の露」ほど歴史は古くないが、こちらも、意外と人気があったのかも知れない。

◈ 化粧の基本

江戸時代の化粧で基本となる白粉と紅については、第2章女の装いの高橋雅夫氏著「江戸の薄化粧」に詳しく書かれているので、参照されたい。

ここでは、女性の結婚や出産に関わる化粧としてお歯黒と眉剃り・眉作りなどについて紹介したい。

・お歯黒

まず、お歯黒であるが、日本で一番古い化粧とされている。平安時代の『源氏物語』や『堤中納言物語』にも書かれ、成人（十二歳～十四歳）した女性がお歯黒をする様子が描かれている。そして、江戸時代になると、お歯黒は化粧のなかでも最も特徴的なものとなり、黒は他の色に染まらないところから、貞女のしるしとされ、結婚が決まるとお歯黒をした。お歯黒は鉄（か）

装いの文化史【入稿】.indb 10-11 2015/06/01 15:15

漿ともいい、原料は、五倍子粉（ヌルデの木にできる虫瘤）と、沸かしたお歯黒水（酢、酒、米のとぎ汁に折れた針、釘などを入れてつくった）で、これを交互に歯に付けると歯が黒く染まった。初めてお歯黒をつける時は、鉄漿付けの式というものを行った。親類縁者の中でも、福徳な女性に鉄漿親になってもらい、お歯黒道具一式を貰って初めてお歯黒を付けた。

江戸時代のお歯黒は地域などで、違いが見られたようだ。喜田川守貞が書いた『守貞謾稿』（一八七三〜五三）によると、江戸時代後期の京坂の女性は、二十一、二歳になったら結婚している人はもちろん、未婚の人でも歯を染める。しかし、髪は改めない。結婚して妊娠五ヶ月頃に髪型を両輪髷に改めて眉を剃った。また、遊女及び芸者は歯を染めた。

かたや江戸の方は、二十歳未満で結婚していなくても歯を染めている者が多い。また、結婚していても、いなくても歯を染めた者は、髪型を丸髷にして眉を剃った。髪型を改め、眉を剃ることを元服といい、お歯黒だけでは半元服といった。吉原では、遊女だけが客の一晩だけの妻になる意味から歯を染めたが、芸者は染めなかった。ちなみに武家の新婦はお歯黒をして丸髷に結ったが、二十三、四歳にならなければ眉は剃らなかった。こうしてみると、お歯黒をするのは京坂よりも江戸の方が早かったようだ。それに京坂の遊女、芸者は歯を染めたが、江戸では吉原の遊女だけであった。

なぜ、このように身体の一部である歯を黒く染める行為が長く続いたのだろう。たぶん約束事の表徴に用いてきたことと、社会的な認知の方法だったからで、これは一環して変化しなかった。黒という色の性質と同じである。

また、それだけでなく、大きな理由は歯のためによかったからであろう。鉄漿水の酢酸第一鉄溶液は、歯のリン酸カルシゥムを強化し、五倍子粉のタンニンは歯質蛋白を収斂させ、歯槽膿漏を予防する。二つが混ざったタンニン酸第二鉄溶液は、歯の表面を覆って歯を保護し、虫歯を予防する優れた化粧だった。

明治時代になって、お歯黒は、来日した外国人たちの目に奇異に写ったことから、明治三年（一八七〇）の太政官布告、続く六年（一八七三）には、昭憲皇太后が率先して止められたのを機に、徐々に一般の女性たちも止めるようになった。

・眉化粧

江戸時代の眉化粧は、庶民の女性たちにとって大きな意義のある化粧の一つとなっていくが、それは室町時代に成立した武家故実（昔の儀式、法制、服飾などの規定・習慣）などから発生した結果とみることができる。しかし、眉化粧独自で書かれたものは見当たらず、わずかに殿中女房に関して書かれた『大上臈御名事』（一五八九）や、婚礼について書かれた『嫁入記』に記されるだけであった。

これが、江戸時代になると、女性の教養書などに書かれるようになっていく。『女用訓蒙図彙』（一六八七）に、「眉は貴賤おしなべて今は墨をひくなり。是遊女のうつしなり…」とあったり、『女重宝記』（一六九二）に、「眉にしんをいるゝ事　霞のうちに弓張月のほのほのといづることく、うすうすと引給ふべし。墨こくふときハ、いやしくて六地ぞうのかほのごとし。

装いの文化史【入稿】.indb 12-13　2015/06/01 15:15

…」などと書かれている。

庶民の眉化粧は上流階級のような眉を剃って額に別の眉を描くというのではなく、形を整え、顔形にあった描き方をするように教えている。このような教養書が一般の人達に読まれるようになったのは、庶民の生活が経済的にも文化的にも向上し、武家礼法にならった作法を取り入れるようになったからであろう。眉墨は、油煙に油を混ぜたものや、摺り墨なども使った。若い女性は、顔の形に合わせて眉を描いた。短い顔は細く三日月のようし、長い顔、大きな顔には少し太めにした。下ぶくれの顔は太く作り、瓜実顔には少し薄くつくった。

お歯黒のところでも述べたが、婚約すると歯を黒く染めた。これを半元服といい、子供が出来ると眉を剃った。これを本元服といったのである。このようなことから、江戸時代は、女性の顔を見れは、ある程度の年齢や、未婚、既婚などがわかったのである。

この眉剃り・眉作りといった化粧は、明治時代になってお歯黒同様、徐々に姿を消すことになる。

装いの文化史【入稿】.indb 14 2015/06/01 15:15

第2章

女の装い

江戸時代に花ひらいた装いの文化

髪と髪飾り

江戸時代の髪型

村田孝子◉ポーラ文化研究所

井原西鶴が描いた『好色一代女』（一六八六）の中に、「女は髪かしら姿のうはもりへといへり」とある。女は髪かたちが姿の上で一番大事なものという諺と「うはもり」とは最上のものという意味である。この諺は江戸時代を通じて生きていた。それは女性の髪型の変遷をみれば一目瞭然で、美しさを追い求めた女心の変遷でもある。

江戸時代は、女性の髪結史上、最も華やかな時代であり、その種類は数百種にも及んだといわれている。当時は年齢や職業、地域や身分、階級、また未、既婚などによって髪型が違っており、一目みれば、どこのどんな女性なのかがわかった。

江戸時代以前の髪型は、後ろに垂らした垂髪や下げ髪が主であったが、安土、桃山時代になると徐々に結い上げられるようになった。当時、中国や朝鮮との往来が頻繁であったためか、

葉うた虎之巻

豊原国周画　口に櫛をくわえた女髪結が遊女の髪を結いあげている。これから髷をつくるところで、女髪結の腕の見せどころである。遊女もきせるを手わたしている禿も一服している午後のひとときであろう。
大判錦絵
文久（1861～63）頃
ポーラ文化研究所所蔵

装いの文化史【入稿】.indb 16-17　2015/06/01 15:15

中国女性の髷（まげ）を模倣したと思われる唐輪髷や、下げ髪が煩わしい時には笄に髪を巻きつけて髷を結ぶことなどが行われた。

江戸初期は、公家や武家階級の女性たちは依然として垂髪だったが、女歌舞伎や遊女などが兵庫髷や島田髷、勝山髷などを結い始め、いずれもその後一般庶民にまで及んでいった。

兵庫髷は寛永（一六二四〜四三）の初めごろ唐輪髷が簡略されて生じた髷で、名称の由来としては、摂津兵庫の遊女からとか、兵庫樽（片手桶）に似ているところからなどといわれている。最初は遊女の髪型であったが、のちには一般の女性も結うようになった。しかし、元禄頃になると流行おくれとなり、わずかに中年婦人の間で結われる髪型となった。

島田髷は、若衆髷が変化したもので、日本髷の代表的な髪型のひとつである。島田髷は東海道島田宿の遊女から始まったというのが通説になっているが、この髷も諸説がある。女歌舞伎の島田花吉から始まったという説、そして歌舞伎役者の島田甚吉から流行し始めたという説、また、島田万吉から起こったという説もある。そのほか、しまりよく束ねる意のシメタガネルの略転という説がある。島田髷もいろいろなバリエーションが生まれ、江戸時代全般を通して若い女性に好まれた。

勝山髷は承応から明暦（一六五二〜五七）にかけて、江戸吉原の遊女勝山が結い始めたといわれる。この髷も、兵庫髷や島田髷と同様、諸説がある。第一は宝永（一七〇四〜一〇）の初め大坂から勝山湊という若女形が江戸に下って髪を大輪に結び、これを勝山といった。第二に、勝山仙列という俳優から起こった。第三に、勝山仙州という俳優からというものである。

青楼七小町　玉屋内花紫
喜多川歌麿画
寛政６〜７年 (1749〜95) 頃
千葉市美術館所蔵

燈籠鬢に貝髷、べっ甲の櫛、簪を挿している。燈籠鬢のところを細い布切れであろう、縛っている。これは、風呂に入ったときや、顔を洗ったりしたとき、鬢が崩れてこないようにしたものと考えられる。筆先を舐めて、これから客に逢いに来てくれるように、手紙を書くところだろう。これも、遊女の仕事の一つである。

装いの文化史【入稿】.indb 18-19　2015/06/01 15:15

美人結髪図
歌川国芳画
角すり物
弘化(1844 ～ 48)頃
たばこと塩の博物館所蔵

女髪結が結いあげた髪を合せ鏡で見ている。「今日は本当によく結いあがっているネェ」などと言っているのかもしれない。女髪結の髪には、今まで使っていたなで櫛がささっている。

婦人たしなみ草
(三代)歌川豊国画
大判錦絵
弘化元年(1844)
ポーラ文化研究所所蔵

頭を下にさげて髪を梳いている姿は今では見られない。肩に掛けているのは前垂れで、これから自分で髪を結い上げるのだろう。元結やそれを切るハサミが見えている。

装いの文化史【入稿】.indb 20-21 2015/06/01 15:15

勝山は、着物の丹前風を生み出したように斬新な感覚の持ち主でファッション面で常に世間の注目をひいた。卑しからぬ身分の出であることも手伝い、屋敷風、すなわち下げ髪を曲げて輪にし、白元結をかけるといった工夫をして道中したところ大流行した。

いずれも江戸時代を代表する髷であり、ほとんど遊女や女歌舞伎から生まれ一般の人達に流行していったが、反対に上流階級から流行していった髪型として、笄髷があげられる。室町時代、宮中の女官たちが下げ髪を笄に巻きつけて上にあげたところから、江戸時代の貞享、元禄（一六六四～一七〇三）頃、民間に流行して一般にも行われるようになった。

この笄髷、初めは笄を用いて髷に結んだものの総称であったが、時代が下るにしたがって、総称であった笄髷も個々の形に添った名前へと変化していった。先笄、両手といった髷がその例である。

江戸時代初期の髪型の中で主役といえば髷であった。といっても、いわゆる日本髪を構成する要素である前髪、鬢（びん）、髱（たぼ）、髷の四つがまだ完全に独立する形にはなっていなかったからである。

延宝（一六七三～八〇）頃から、髱が少しづつ長くなり、元禄の頃になると、うしろへ突き出した形へと変化し、流行していった。これは鷗髱といわれるもので、格好が鷗の尾羽に似ているところから、その名がついた。

宝永になると髱は長く下へ引き出すようになったが、享保（一七一六～三五）の中頃には、すこし短めになっていった。そして、享保の終り頃になると、髱差しという小道具が工夫さ

兵庫髷

寛永～元禄

寛永の初めごろ、唐輪髷が簡略されて生じた髷で、最初は遊女の髪型であったのが、のちには一般の女性も結うようになった。しかし、元禄ごろになると流行おくれとなり、わずかに中年婦人の間で結われる髪型となった。

勝山髷

承応～明暦

寛永の初めごろ、唐輪髷江戸吉原の遊女勝山が結い始めたといわれている。着物の丹前風を生み出したように斬新な感覚の持主であり、また、卑しからぬ身分の出であることも手伝い、屋敷風の髪型を工夫して道中したところ大流行した。

装いの文化史【入稿】.indb 22-23 2015/06/01 15:15

下げ髪

安土・桃山時代〜江戸時代初期
「松浦屏風」に見られる髪型である。長く垂らした黒髪が賛美された平安、鎌倉時代を経て、室町時代に至っては、一般庶民の女性は思い思いに工夫し、働きやすいように処理していた。

元禄島田髷

元禄
島田髷は日本髪の代表的な髪型のひとつ。「若衆髷」が変化したもので、東海道島田宿の遊女から始まったというのが通説である。鬢の一部と髷が重なり、うしろへ長く突出した「鷗髷」が流行し、一世を風靡した。

唐輪髷

天正
十六世紀末から結われたこの髷は、中国女性の髷を模倣したところから名付けられた。遊女や歌舞伎役者の頭上にゆったり束ねられた髷は野性味ある雰囲気をもち、当時の風俗屏風に多く描かれている。

玉結び

貞享〜元禄
髪を背にたらし、その末端を折り返して輪としたもの。髪の輪が上の方にあり大きいものは下級、輪が小さく髪の先の方で結ばれたのが品があるとされた。

装いの文化史【入稿】.indb 24-25 2015/06/01 15:15

◆主な参考文献（㊟は活字本を意味する）

『射和文化史』射和村教育委員会　一九五六
『一話一言』大田南畝　一七七九～一八二〇　㊟　日本随筆大成別巻　吉川弘文館　一九七八～七九
『浮世絵』たばこと塩の博物館㈶専売弘済会一九八四
『浮世絵と喫煙具』㈳専売事業協会一九六七
『浮世絵に見る江戸の暮らし』橋本澄子・高橋雅　夫編　河出書房新社　一九八九
『浮世風呂』式亭三馬　一八〇九～一三　㊟　日本古典文学大系六三　岩波書店　一九五七
『江戸買物獨案内』一八二四（覆刻）近世風俗研究会　一九五八
『江戸看板図譜』林美一　三樹書房　一九七七
『江戸結髪史』金沢康隆　青蛙房　一九六一
『江戸語事典』三好一光編　青蛙房　一九七六
『江戸の粋　東都文物往来』別冊太陽　平凡社　一九八一
『江戸のデザイン』小学館　一九七七
『江戸の二十四時間』横山恵一編　中央公論社　一九八〇
『江戸繁昌記』寺門静軒　一八三二～六　㊟　東洋文庫　二五七　二七六　平凡社　一九七四～五
『江戸武家事典』稲垣史生編　青蛙房　一九七六
『江戸吉原図絵』花咲一男編　三樹書房　一九七六
『絵本時世粧』歌川豊国　一八〇二
『絵本江戸化粧志』花咲一男編　近世風俗研究会　一九五五
『絵本江戸紫』歌川豊国　一八〇三
『絵本御伽品鏡』長谷川光信　一七三〇
『絵本青楼美人合』鈴木春信　一七七〇
『絵本和国諸職絵尽』菱川師宣　一六八五
『絵本十寸鏡』西川祐信　一七四八
『江馬務著作集第四巻・装身と化粧』江馬務　中央公論社　一九八八
『鉛丹及び鉛白と鉛屋市兵衛』株式会社鉛市商店　合資会社萩田商店　一九三九
『お伊勢まいり』西垣晴次　岩波書店　一九八三
『岡崎智予コレクション』紫光社　一九七八
『白粉と白粉商』土居保太郎『絵入工芸風俗』所収　一九二八
『お歯黒の研究』原正三　人間の科学者　一九八一
『女鏡秘伝書』一六五〇
『女重宝記』艸田寸木子（苗地丈伯）一六九二
『女用訓蒙図彙』奥田松柏軒　一六八七　㊟　家政学文献集成　渡辺書店　一九七〇
『家具と室内意匠の文化史』小泉和子　法政大学出版局　一九七九

『甲子夜話』松浦静山　㊟　東洋文庫三〇六　平凡社　一九八八
『髪』高橋雅夫編　NOW企画　一九七九
『茅窓漫録』茅原虚斎　一八三三　㊟　日本随筆大成一期二二　吉川弘文館　一九七六
『嬉遊笑覧』喜多村信節　一八三〇　㊟　日本随筆大成別巻　吉川弘文館　一九七九
『近世紅花問屋の研究』沢田章　大学堂書店　一九六九
『櫛・かんざし』岡崎智予　一九七八
『櫛・かんざし展図録』岡崎智予　一九七九
『くすりの歴史』岡崎寛蔵　講談社　一九七六
『化粧』久下司　法政大学出版局　一九七五
『化粧史文献資料年表』村沢博人・津田紀代編　ポーラ文化研究所　一九七九
『化粧眉作口傳』水嶋卜也　一七五六、一七六二
『結髪雛形集』（江戸時代）
『兼葭堂雑録』暁晴翁撰　一八五九　㊟　日本随筆大成一期一四　吉川弘文館　一九七五
『香と香道』香道文化研究会編　一九八九
『香道』杉本文太郎　雄山閣　一九八四　増補改訂版
『香道の作法と組香』蜂谷宗由監修　長ゆき編　雄山閣出版　一九七八
『香道への招待』北小路功光　宝文館　一九六九
『香道――歴史と文学』三條西公正　淡交社　一九七一
『香料――日本のにおい』山田憲太郎　法政大学出版　一九七八
『きせる』たばこと塩の博物館　㈶たばこ産業弘済会　一九八八
『古事類苑』三一　器用部　一九〇九　吉川弘文館　一九五八
『御殿女中』三田村鳶魚　春陽堂　一九三〇
『骨董集』山東京伝　一八一三～五
『婚禮道具諸器形寸法書』『婚禮道具圖』江戸時代　㊟　『婚禮道具圖集』所収　覆刻日本古典全集　現代思潮社　一九七八
『西鶴全集』上　井原西鶴　㊟　日本古典文学大系　四七　岩波書店　一九五七
『賤のをだ巻』森山孝盛　一八〇二
『時代風俗考証事典』林美一　河出書房新社　一九七七
『洒落本大成』全三九巻　中央公論社　一九七八～八八
『春色梅児誉美』為永春水　一八三二～三三　㊟　日本古典文学大系六四　岩波書店　一九六二
『商人買物獨案内』一八三三（覆刻）近世風俗研究会　一九六二
『職人尽（七十一）歌合』一七四四　覆刻版本文庫三　国書刊行会　一九七四
『神宮御師資料内宮篇』皇學館大学史料編纂所　一九八〇
『人倫訓蒙図彙』一六九〇　㊟　覆刻日本古典全集　現代思潮社　一九七八
『図絵江戸おんな百姿』花咲一男編　一九七六
『図説大江戸の賑わい』高橋雅夫編　河出書房新社　一九八七
『図説広告変遷史』中部日本　東京中日新聞社　一九六一

装いの文化史【入稿】.indb 168-169　2015/06/01 15:24

『世界喫煙史』宇賀田為吉　㈶専売弘済会　一九八四
『川柳江戸喫煙志』清博美　太平書屋　一九九〇
『川柳・雑俳からみた江戸庶民風俗』鈴木勝忠　一九七三
『川柳吉原風俗絵図』佐藤要人編　至文堂　一九七三
『続飛鳥川』活日本随筆大成二期一〇　吉川弘文館　一九七四
『続・日本の文様』北村哲郎　源流社　一九八八
『太陽』特集化粧模様　平凡社　一九八五
『太陽コレクション士農工商Ⅲ職人』平凡社　一九七九
『太陽スペシャル香りの世界』平凡社　一九八七
『たばこ入れ』たばこと塩の博物館　㈶たばこ産業弘済会　一九八六　㊟
『煙草及煙管考』西沢米二郎（仙湖）『仙湖遺稿集』　一九二〇
『タバコの歴史』宇賀田為吉　岩波書店　一九七三
『煙草文化誌』宇賀田為吉　東峰書房　一九八一
『田村コレクション化粧道具と髪飾り』田村伎都子　一九八二
『中陵漫録』佐藤成裕　一八〇〇～二六　㊟　日本随筆大成三期三　吉川弘文館　一九七六
『千代田城大奥』永島今四郎　朝野新聞社　一八九二
『貞丈雑記』伊勢貞丈　一七八四
『道具からみた江戸の生活』前田久太郎　ぺりかん社　一九七八
『當世かもじ雛形』安部玉腕子　一七七九
『徳川実紀』国史大系編修会　吉川弘文館　一九八一
『浪花髪鏡』三蝶斎広信画　宮尾しげを復刻　一九五〇
『浪華百事談』㊟　日本随筆大成三期二　吉川弘文館　一九七六
『匂いの中の日本文化』小泉武夫　NGS　一九八三
『匂ひ・香り・禅』〈東洋人の知恵〉　関口真大　日貿出版社　一九七二
『日本結髪全史』江馬務　立命館出版部　一九三六
『日本結髪全史』江馬務　東京創元社　一九五三
『日本史小百科　家具』小泉和子　近藤出版社　一九八五
『日本書紀』舎人親王・太安万呂他　七二〇　㊟　日本古典文学大系六七、六八　岩波書店　一九六五～六七
『日本煙草考』神田孝一　㈶たばこ総合研究センター　一九八八
『日本の髪』橋本澄子　三彩社　一九六七
『日本の髪型』浜時次郎　女性モード社　一九六五
『日本の化粧』ポーラ文化研究所編者　一九八九
『日本の女装』吉川観方　人形師範会　一九六八
『日本の女装』吉川観方　故事研究会　一九七六
『日本の美術』三調度　岡田譲編　至文堂　一九六六
『日本の美術』二三結髪と髪飾り　橋本澄子編　至文堂　一九六八
『日本の美術』三七ガラス　岡田譲編　至文堂　一九六九
『日本の美術』四二和鏡　中野政樹編　至文堂　一九六九
『日本の美術』二七五化粧道具　小松大秀編　至文堂　一九八九
『日本の美術』二七六香道具　荒川浩和編　至文堂　一九八九
『日本の美術』二七七婚礼道具　灰野昭郎編　至文堂　一九八九
『日本袋物概史』京都袋物協同組合　一九七七
『日本紅之研究』羽根田作兵衛　小町紅本舗　一九二八
『野村コレクション小袖屏風』国立歴史民俗博物館　朝日新聞社　一九九〇
『誹風柳多留全集』岡田甫校訂　三省堂　一九七六～七八
『初音の調度』徳川美術館　一九八五
『半日閑話』大田南畝　㊟　日本随筆大成一期八　吉川弘文館　一九七五
『版本』たばこと塩の博物館　㈶たばこ産業弘済会　一九九〇
『百人女郎品定』西川裕信　一七二三
『武江年表』斎藤幸成　一八四九～五〇　㊟　東洋文庫一一六　一一八　一九七六～七
『紅』――伊勢半一七〇年史――澤田亀之助編　伊勢半　一九五九
『本朝世事談綺』菊岡沾凉　一七三四　㊟　日本随筆大成二期一二　吉川弘文館　一九七四
『眉之事』江戸時代
『眉の文化史』津田紀代・村田孝子　ポーラ文化研究所　一九八五
『三田村　鳶魚江戸生活事典』稲垣史生　青蛙房　一九七六
『水嶋卜也秘書』水嶋卜也　一六七九
『都風俗化粧伝』佐山半七丸　一八一三
『都風俗化粧伝』（活字本）高橋雅夫校注　東洋文庫四一四　平凡社　一九八二
『最上紅花史の研究』今田信一　飛鳥書房　一九七二
『最上紅花史料』今田信一　日本常民文化研究所　一九四二
『守貞漫稿』喜田川守貞　一八三七～五三
『容顔美艶考』並木正三遺稿　浅野高造補著　一八一九
『用捨箱』柳亭種彦　一八四一　㊟　日本随筆大成　一期一三　一九七五
『姫入記』伊勢貞陸　㊟　群書類従第二十三輯武家部　続群書類従完成会　一九八三
『柳庵随筆』栗原柳庵　一八二〇　㊟　日本随筆大成二期一七　吉川弘文館　一九七四
『類聚近世風俗志』（『守貞謾稿』の活字本）魚住書房　一九七〇
『歴世女装考』岩瀬百樹　一八四七
『我衣』曳尾庵　一八二五　㊟　燕石十種第一　中央公論社　一九七九
『和漢三才図会』寺島良安　一七一三　㊟　東京美術　一九七六

装いの文化史【入稿】.indb 170-171　2015/06/01 15:24

おわりに

現代につながる日本人の生活風俗の変化は、明治維新を境目に始まったとされる。とくに和服から洋服へと日本人の装いに大きな変化が生じ、戦後はそのスピードが増した。最近は、歌舞伎へ観劇に行く女性が和服で装う姿は見かけても、テレビアニメ「サザエさん」に登場する母親・磯野フネのように、日常生活で和服を着て仕事をする主婦の姿を見かけることはほとんどない。和服姿で町中を歩く男性の姿を見かけることも、昭和の時代と比べてずいぶんと減ったように思う。

また、和服を着た男性がたばこ入れを提げて、きせるを用いてたばこを吸う姿も見られなくなり、結婚式では振袖に文金高島田でも、頭は仕上がった鬘を被るのがふつうで、地毛で日本髪を結う女性など、お目にかかることはまずないだろう。

本書は〝はじめに〟でも述べた通り、江戸時代の女性の「髪と髪飾り」「化粧」「服飾」をテーマに、平成三年（一九九一）、たばこと塩の博物館とポーラ文化研究所で共催した特別展「粧いの文化史〜江戸の女たちの流行通信〜」の図録に掲載した原稿を基に訂正加筆し、江戸時代の男性の「髪型」や「服飾」の新稿も加えて一冊にまとめたものである。その意図するところは、「江戸時代における男女の装い」をテーマに、日本人の装いに関する流行と美意識の変遷を、江戸時代初期から幕末まで俯瞰しながら、分かりやすく紹介することにある。

もとより紙面の制約から十分説明を尽くせなかった箇所もあるが、本書を手に取ってくださった読者には、まずは入門書として活用いただき、さらに個別の事項について興味を膨らませていただければ、これにまさる喜びはない。

最後に、本書刊行に当たってお世話になった三樹書房編集部の木南ゆかり氏、山田国光氏に対して感謝の意を表します。

たばこと塩の博物館　谷田有史

装いの文化史【入稿】.indb 172-173　2015/06/01 15:24

◈協力者（五〇音順・敬称略）

青木英夫
青木美智子
佐藤光信
長島保子
林　照乃
八木敬一

国立歴史民俗博物館
千葉市美術館
公益財団法人　平木浮世絵財団　平木浮世絵美術館
百楽庵
公益財団法人　大和文華館

※掲載につきましては、権利者の方々にご承諾をいただいておりますが、一部、手をつくしましたが権利者が不明なため、ご了承をいただけぬまま掲載をいたします。その方々の肩書きは、当時のものに元と付けて掲載いたしました。お心あたりのある方は、三樹書房編集部までご一報をお願いいたします。

装いの文化史【入稿】.indb 175 2015/06/01 15:24

谷田有史
（たにだ・ゆうし）

1958 年、東京生まれ。1980 年、國學院大学文学部史学科卒。1981 年よりたばこと塩の博物館学芸員として勤務。現在は、同館主任学芸員。著書に『浮世絵に見る色と模様』（共著・河出書房新社）、『江戸川柳で読み解くお酒』（共著・山愛書院）など。

村田孝子
（むらた・たかこ）

ポーラ文化研究所 シニア研究員。主に日本と西洋の化粧史・結髪史を調査している。著書に『眉の文化史』『モダン化粧史』『日本の化粧』『結うこころ』『婦人たしなみ草　江戸時代の化粧道具』（いずれもポーラ文化研究所刊）、『江戸 300 年の女性美　化粧と髪型』（青幻舎）など。

江戸時代の流行と美意識
装いの文化史

監　修　　谷田有史　村田孝子
発行者　　小林謙一
発行所　　三樹書房
〒 101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-30
電話 03-3295-5398
FAX 03-3291-4418
http://www.mikipress.com
組版・装丁　　閏月社
印刷・製本　　シナノ パブリッシング プレス
©MIKI PRESS 三樹書房 2015, Printed in Japan

本書の内容の一部、または全部、あるいは写真などを無断で複写・複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利の侵害となります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版権管理部に許諾を求めて下さい。